

老人国

前篇



夢遊星人

老人国

夢遊星人 作

前篇 (1-3)

1

ある晩のことです。のんびりとタブレットで読書をしていると、玄関のチャイムが鳴りました。ほとんど友達のない私ですから、こんな時間に誰だろうと、ちょっと不安になりました。大家さんがまた何かの苦情だろうか、自転車を通路に置かないでくれとか、家賃の値上げとか。いやいやながら立ち上がって玄関へゆき、のぞきレンズからのぞいて見ると、変な帽子をかぶった、背の低い妙な動物が、手に何かをさげて立っています。

「どちらですか」

と声をかけながら、ドアを細めに開けました。

「タヌキの宅配便です」

という返事でした。はて、狐の飛脚便なら聞いたことがあります。タヌキまで業界に参入したのでしょうか。とにかく、タヌキならさしたる悪さをしなかりょうと思ひ、扉をもう少し開けて、宅配員の全身が見えるようにしました。

「こんなに遅くすみません」

と、妙なナリのタヌキは言いました。そして、手にさげている通い帳のようなものを開き、「ムユウ セイト さんですね」と確かめました。

「そうです」と答えると、意外なことに、タヌキの宅配員は、開けた扉をすりりとくぐって、私と扉の間に立ちました。私は思わず、いつも新聞の押し売りの時にそうするように、体でもって押し返そうとしましたが、なにせ、タヌキは私の半分ほどの背丈しかない。かえってひるんで、一歩下がってしまいました。すると、扉がぱたんと閉まってしまいました。

「すみません、直接伝言するようにとの依頼です」

「そんな宅配便は聞いたことがない」

私はどう対処しようかと考えながら、この奇妙なタヌキをよく観察しました。タヌキですから、顔と、よくつき出た腹はこげ茶色です。先ほども言った変な、円錐形のわら帽子を、あご紐で結んでいます。手には通い帳、腰には五合ほども入る徳利をぶら下げています。どこかで見たような気がしました。

「君はもしかして、ブンブク・タヌキではないかい」

「よくござんじで。そのとおりです」

「ブンブクなら、こんな所にいないで、どこかのお寺にいるはずだが」

「今はお寺をやめて、＜老人国＞で宅配の仕事をしています」

ブンブク・タヌキは茶釜に化けて、和尚さんを驚かせたいたずらものですが、以来お寺のマスコットになっていると聞きました。それがどういうわけで転職したのでしょうか。

「＜老人国＞とは聞いたことがないね。いったいどうして、そんな奇妙な国へ、引っ越したりしたんだい」

「＜老人国＞では、老人ばかりでなく、動物も大事にされていますからね。もともと僕たちは老人が好きなのです。遊んだり、散歩したり、時にはいたずらもしますがね」

「その＜老人国＞のお使いだと、君は言うんだね。たぶん養老院か何かだと思うが、私には老人の親もいないし、宅配など来る心当たりもないんだが」

「ごもっともです」と、ブンブクは穏やかに言いました。家をまちがえたのではないかとも思いましたが、私の名前に違いありません。落ち着きはらったタヌキを見ていると、何か事情がありそうです。その顔といい言葉づかいといい、なんとなく信頼できそうな気がして、私は言いました。

「まあ、とにかく汚い部屋だけど、上がってみるか」

言うが早く、ブンブクは遠慮なくわらじを脱いで、スタスタと部屋に上がりました。本だのお菓子の袋だの、雑然と散らばった座卓の向こう側に、心得たようにちょこんと坐りました。その遠慮のなさ、いかにもペットの動物らしく思われました。

「さて、一体誰からの伝言なのかね」 私は事務的に聞きました。

「＜老人国＞のダルマ大統領からです」

近頃ネット・ニュースをあまり見なくなり、世情に疎くなっていましたので、老人国はおろか、ダルマなどという大統領も初耳です。友達さえいない私ですから、どこかの国の大統領となると、まるで無縁の世界の人のように感じました。そこで少し気おされて、言いました。

「そんな偉い人が、私などになんの用だい。政治にはまるで関心がないのだが。今度の選挙に一票をとるのはお断りだよ」

「そんなことはありません」 ブンブクは澄まして言いました。

「ダルマ大統領がセイトさんの物語を読まれて、ひとつ＜老人国＞に招待しようと言い出したのです。セイトさんが動物の言葉を理解されるということが、ダルマさんの気に入ったらしいのです」

「私が動物の言葉を理解するといっても、小説の上でのことだけだね」

「いいえ、実際、僕と言葉を交わしているではないですか」

言われて見ればその通りです。私もタヌキと話ができるとは思っていなかったのですが。

「そうか、それは面白いことだね。妙な小説でも書いてみるものだな。それにしても、誰も読まないと思っていた小説が、思わぬところで、思わぬ人に読まれたものだ」 私はちょっと面はゆい気がしました。

「ご存知のように」と、ブンブクはつづけました。「ダルマさんは手も足もありません。そこで、ご招待を直接、口頭で伝えて欲しいということです」

「しかし、私は老人国がどこにあるのかを、知らないのだよ」

「ご心配はいりません」　そう言って、ブンプクは五合徳利のようなものの中から巻いた紙を取り出しました。

「これは老人国へ行く道筋の、だいたいの地図です」

巻いた紙を広げてみますと、少々稚拙な手で、ハイキング地図のようなものが描かれていました。地図としてはなんとも心もとないものでしたが、とにかくゴールには老人国と記されていました。

「これだけでは一体どこから歩き始めるのか、分からないではないか」

「大丈夫です。迷ったら僕がご案内します。下車駅もあとでお教えします」

私はしばらくその地図を見つめて、想像にふけたあと、思い出したように聞きました。

「ところで、＜老人国＞とはどんな国なんだい」

「老人だけの暮らす国です。正確に言えば、老人と動物だけの暮らす国です」

「それは初耳だね。さぞかし不便ではないかい」

「とんでもない。老人が便利に暮らせるために作られた国ですから。老人は、若者や壮年者と一緒に暮らすから、不便を強いられるのです。老人どうし、老人のために作られた社会では、老人以外の人たちになんの遠慮もいらぬのです。そう、ダルマ大統領は言っています」

「しかし、何もかも老人がやってのけるのは、難しいのではないかい。知力はまだしも、体力が衰え、病気がちの、明日の知れない老人たちが」

「きっと、セイトさんもそう思うだろうと、ダルマさんが言っていました。だから実際に来てもらって、老人国の本当の姿を、この国の人たちに知らせてほしいと」

「私にそんな大事な務めができるかどうか、自信はないね」

「手も足もないダルマさんが大統領を務めているのですから、セイトさんも弱気にならないで下さい」

「いや、文字ぐらいは書けるが、この地図によるとだいたひ山奥へ入るようなので、体力が心配なのだ」

「老人国へは、たいていのお年寄りも歩いてこられます。時には何日もかけて、途中からは僕たちがご案内します」

「私はまだ高齢者ではないのだが」

「セイトさんは、特別のご招待です」

私はちょっと腕組みをして考えました。様子では一日二日で帰れそうにない。せっかく出かけるのなら、一週間は余裕を見なくては。さいわい今の仕事は週三日ほどでしかない。誰にも読めない小説などを書いて暇をつぶすよりも、面白い冒険になりそうである。そう決めて、私は答えました。

「そうだね、来週休みを取って出かけることにしよう。どこの駅で降りたらいいんだい」

ブンプクは徳利を振って、中から切符を出しました。

「明日出発してください」

「え、急だね。・・・親でも死んだことにしなくちゃ」

ブンブク・タヌキが帰っていったあと、ちょっとキツネならぬ、タヌキにつままれたような気がしてきましたが、テーブルの上にある切符は、木の葉に化けたりなどはしませんでした。有効期限二日、私の住む町からかなり西のほうの、Ubasute駅までの切符でした。そんな名の駅が、たしか山中のローカル線にありました。地図で調べてみると、二回ほど乗り替えしなければなりません。周囲は山また山のようです。

老人でも歩いてゆけるのだから、そうたいした高山ではあるまい。本格登山はしたことがありませんが、いつものハイキングのつもりなら、明日にも出かけられる。せっかくの奇妙な冒険のチャンスなのですから、騙されたと思って、とにかく駅まで行ってみよう。そこから先は・・・、私はへたくそな地図をもう一度見直しました。まあ、迷ったら野宿でもしてみようか。季節はまだ秋の中頃ですし、凍死するようなこともあるまい。

翌朝は普段より早く起きました。いちおうの支度をして、いつもの勤め先とは反対の、西へ向かう電車に乗りました。三十分も乗ると、丘陵地や小山が迫ってきます。山の多いこの島国ですが、好き好んで山中に暮らそうとするのは、どういう人たちなのか、若者たちは都会に出て、年寄りだけが残されて、過疎の村だらけだといえます。その流れにあえて逆らって、みずから山中の村に集まってくる老人たちは、いったいどんな国づくりをしているのでしょうか。

電車を乗り換え、さらに西へ進むにつれ、どんどん山は近づき、深くなってきました。まだ色づくには早いのですが、夏の頃の元気な緑が心なしか黒ずんできて、黄ばみを見せている梢もあります。車窓から次々に現われる山を見ていると、そこに一人登っている自分を想像して、不思議な気持ちになってきます。誰もあんなところに、なにを好き好んで人が暮らしたり、意味もなく歩いているとは思いません。この世とは別世界なのです。

とはいえ、たいていの山には所有者がいて、杉や檜が植林され、また茶畑になっていることを、知らないわけではありません。それでもめったに人がいないのですから、この世とは時間、空間のペースが違います。そんなところに独り寝ころんでいたら、まるで仙人のような気分でしょう。

そんなことを想像しながら、乗換駅で北へ向かうローカル線を待ちました。平日の昼間ですから、ほとんど乗る人はありません。一人旅の好きな私でも、さすがに不安になることがあります。いったい人影のまれないこの電車は、自分をどこへ運んでいくのだろう。たどり着いた先に、泊まる場所などあるのだろうか。そんな不安にかられる時には、私はあとにも先にも、何一つとられるものはないのだという、悟りのような心境になります。身ひとつあれば、人間は生きていけるのだ、動物より、少々やっかいな点はあるものの。そう、自分に言いかけます。

やっと電車に乗って、嫌になるほど長いこと座席に坐りつづけたあと、午後遅くちょっとした

町で降りました。名前のとおり老人の多い町なのかと思うと、ごくありきたりの田舎町でした。さすがにこれから山中に分け入る気にはなれないので、昔風の旅館に泊まりました。曇も黄色くなって、デコボコしていましたが、とにかく布団にくるまって眠ればよい。お風呂に入ろうとしたら、客は私一人らしく、沸かしすぎてとても中へ入れない。浴びるだけにして、さっさと寝てしまいました。

朝だけ食事を頼んでいたので、何だかべとつく食事をしながら、歳の食った女将さんに、老人国のことを聞いてみました。そんな場所は知らないという、そっけない返事でした。聞きかたが悪かったのかと思いましたが、それ以上聞くのはやめました。そっけないお婆さんに、馬鹿丁寧なあいさつをして、宿を出ました。

秋晴れの良い天気でした。ハイキング日和という言葉がぴったりです。車がけっこう往来する国道を越えて、少しゆくと、もう里山の風景です。田んぼはもう稲が刈られて、平坦ないがぐり頭がつづいています。その先には早くも低山が迫っています。さて、と私はへたくそな地図とにらめっこしながら、西のほうへ向かっていました。村の郵便局の赤いポストが、最初の入口のようです。その今ではめったに見かけない、赤いポストの立つところを左に曲り、しばらくゆくと、民家もまれになり、舗装が途切れたところに、北向き地蔵がコスモスに囲まれて立っていました。右の方へ折れるのは林道のような道でした。車のわだちのあるかなり広い道で、北に向かっていました。もう一方の道は、そこから左に入る登山道でした。それが老人国への、徒歩でゆく近道になっているようです。

いよいよ山道ですから、少し気持が変わります。杉林の中へ一歩入っていくだけで、しんとした山の気が身内にしみてきます。どちらを見ても木々ばかり、足元にはしっとりした土の感触、落葉のゆかしい香り、見上げる細長い空には憧れが漂っています。そして一人で山に入るときの、心地よい心細さ。心のしこりがほどけるような自由感。そんなものを楽しみながら、誰にも遭うことなく、一時間も登っていくと、ちょっとしたピークに出ました。そこからは低山がいくつも見わたせ、はるか西の先にはこの国のアルプスが、白雪を頂いて連なっていました。

ここで休憩をして、山々を眺めていると、不思議な気持になってきました。こんな人里離れた奥に、老人国などというものが本当に隠れているのだろうか。山の中に突然、瀟洒な料理店が現われてきたら、それもびっくりですが、まして普通の地図にない大統領のいる国が現われてきたら、それこそわが目を疑うことでしょう。まるで宮沢賢治の童話ではないか。さすがに夢想好きな私も、不安になってきました。立ちあがって、先へ進むのをためらっていると、目の前のやぶの下からニワトリほどの鳥がふいと歩み出てきました。緑がかった顔と羽から雉であることが直ぐ分かりました。立ちどまって、じっと私のほうを横目で見ました。そしてずっと、先方のくだりの道へ消えてゆきました。少しして、ケーンと高い鳴き声が響きました。

きっと私にこちらですと言っているのだな、と思いました。私は元気づいて、雉の消えていったくだりの山道を降りはじめました。道は直ぐに次の尾根を目指した上りにかかりました、こんな上り下りをいくつも越えていくようです。確かに気の長い林道よりは近道なのですが、近頃運動不足なせいか、だんだんに息切れがして、脚が痛み出しました。こんなはずではと思いま

したが、私もそれなりの体力のセーブを考える年なのではないでしょうか。休み休み進みました。

いくつめかのピークで、やっと眼下に谷間のような地形が広がっていました。といって人家があるわけではなく、一筋の流れと、その岸に沿って、線路が延びているだけでした。下まで降りてみると、それは貨物車かトロッコの廃線で、もう何年も使われていないらしく、草が繁茂しています。その草の真ん中に、細々と人の踏みしめたようなトレイルが見られました。地図ではそれをたどっていくようになっています。ここまで来れば、老人国はもう直ぐです。ひとまずほっとしましたが、いざ、丈高い草を分けてたどってゆかねばならないとなると、ちょっとしり込みしました。

すると、横の草むらから、小さな鳥たちが出てきました。一目で鶉と分かりました。親鳥と、その背後に小さなヒナたちです。目が合いました。普通こんなふうな出会い頭では、鶉の親子はそそくさと草むらに退却して隠れるものですが、かえって私の目の前に出てきました。

「いらっしゃいませ、セイトさん」 親鳥は言いました。ヒナたちもそれにあわせてピーピーと鳴いたのは、挨拶のつもりだったのでしょうか。

「こんにちは」 私も思わず挨拶を返しました。「私のことを知っているのかい」

「ブンブクさんからのお知らせで、ここでご案内するようにと」

「それはすまないね、ここが通れるのかどうか、迷っていたところだ」

「三ヶ月ほど前に、お一人通っただけですから、跡が消えているかもしれません。でも草が枯れ始めていますから、どんどん進んでいってください」

そこで私は棒切れを拾い、草を分け、くもの巣を払いながら、廃線をたどってゆきました。地図ではこの先に老人国の入口があるはずなのです。谷間の一番はずれまでゆくと、小さな滝がかかっていた。線路はその横へと曲っていました。そしてトンネルの口が見えました。その口の上には、たしかに老人国という文字が読まれました。私はトンネルのように口をぼかんと開けて、そのまだ新しそうな文字板を見上げていました。すると傍らで「いらっしゃいませ」という声がしました。見ると、トンネルの暗がりから、例のブンブク・タヌキが、影から抜け出すように現われました。

「やあ、君か。迎えに来てくれたのかい」

私は旧友に会ったように、ほっとして言いました。

「ここへ来るまでは、半分騙されたような気持だったが、なるほど、隠れ里というのも、あるところにはあるものだね」

「隠れ里というわけではありませんが、今のところ独立宣言をしてませんので、あまり公にしないのです」

「老人国の文字の下に、横文字で書かれているのは？ 英語かい。ええと、Of The Old, By The Old, For The Old」

「そうです、老人の、老人による、老人のための国というわけです。ところで、セイトさんは懐中電灯をお持ちですか」

「いちおうの準備はしてあるよ。山中では何があるか分からないからね」

「このトンネルは照明の設備がしてあるのですが、今節電のために点けていません。足元に気

をつけて通ってください」

そう言ってブンブクは、さすがに動物だけあって、トンネルの暗がりへ苦もなく入っていく。そのあとを、LEDのランプを灯してついてゆく。ずっと先に、豆粒ほどの出口が、闇の中の幻のように浮かんでいます。それがだんだんに大きくなって、緑色のもやもやした模様が浮かびだします。それは向こうの世界の、緑の木々であることが分かってくる。出口までは、私もブンブクも、無言のままでした。明るく開けた場所は、谷間ではなく、台地のような地形でした。たぶん山の頂を平坦にならした土地でしょうか。それが相当な範囲に広がっていました。

3

さて、昔の桃源郷ではありませんから、人家は、全く瀟洒な現代風でしたが、どこを見ても平屋しかありません。普通の二階家はおろか、コンクリートのビルなども見当たりません。もっとも、たまたまこの地区が民家に限られていたせいでもありましたが。道は広く、碁盤目状です。昔の都のようなつくりです。とはいえ、真ん中に支配者の住むような、特別な建物があるわけではないようです。あとで、大統領のハウスに案内されましたが、まったくほかの家と変わらないつくりでした。

「セイトさんもお気づきでしょうが」と、ブンブクは語り始めました。「老人国では、すべての建物、建築物は、バリアーフリーでできています。お国では、ユニヴァーサル・デザインがはりのようですが、ここでは老人のために特化しています」

言われてみると、道にもいっさいの段差や、つまづくようなものはありません。そもそも車道と歩道の区別がないのです。道全体にやわらかなウッドチップが敷きつめてあって、まるで絨毯の上を歩いているようです。街路樹や花壇やベンチが、間隔をおいて並んでいる様子は、まるで広い公園のような光景です。それらの間に、かなりの人影が散歩を楽しんでいるようです。

「車の姿がないようだね」

私はふと気づいて言いました。ブンブクは、答えて、

「老人国では、よほど緊急の場合でなければ、車は使いません。だから特に車道は設けていませんし、信号などという無駄なものもないのです」

まるで公園のように見えたのも、そういうわけでした。道を歩いていくと、かなりの人と出会いました。皆それなりに年老いた男女です。杖をついている人もいれば、かくしゃくと歩いている人もいます。車椅子の人もいますが、それを押しているのもまた老人です。中にはジョギングをしながら近づいてきて、挨拶をかけていく老人もいました。老人たちは皆、ある程度の距離に近づくと、かならず挨拶を交わしました。なかでもブンブクは人気者らしく、わざわざ近寄ってきて、いろいろな話をしたり、冗談を言ったりしました。私もやや緊張しながら、皆の挨拶に答えていました。ブンブクのほかに、かなりの数の動物が、犬や、猫や、ニワトリや、ヒヨコが、公園のような街の中を自由に歩いたり、くつろいだりしていました。

そんな中で、ひとり変わった様子の男性がいました。同じところを何度も行ったり来たりしながら、ぶつぶつと呟いています。その老人に気づくと、ブンブクはすたすたと寄ってゆきました

。

「どうなさいました」

老人はブンプクに気がついて、嬉しそうに答えました。

「やあ、ブンプクか、ちょうどよかった。また私の勤め先を忘れてしまったのだよ。もうお昼過ぎだというのに、大変な遅刻だよ」

「僕がご案内します」

「ああ、よかった。私は一日として会社を休んだことはないのだよ。ずっと皆勤賞だ」

ブンプクは老人の先に立って、道を歩きだしました。私も老人の後からついてゆきます。道の両側には、ゆったりした間隔をおいて、平屋の家が並んでいます。一定の区画ごとに、建物の形や、屋根の色や、壁の色が統一されています。特徴的なのは、どの屋根の上にも太陽光発電のパネルが見られることです。後で知ったことですが、この国のエネルギー源はほとんど電気でまかなわれているのです。またどの家にも小さな庭と、ポーチがついていて、その家に住む人ごとの趣味や、工夫が表われていました。ただ、柵や塀のようなものは一切ありません。それで、隣の家や、道路との境は実にあいまいでした。たぶん存在しないのでしょうか。

それらのこじんまりした、瀟洒なつくりの家は、個人宅でしたが、百メートルもゆくと、やや大きな施設のような建物がありました。どうやらブンプクは、そこへ迷子の老人を案内していくようです。そこも一階建ての、広い建物でした。玄関の所には、ホスピスA1と書かれていました。その自動扉を、ブンプクと老人と私と、入ってゆきました。入ってすぐのところは、大きな広間になっています。ソファーやテーブルが配置よく置かれていて、いく人かの老人がくつろいでいます。大きな明るいガラス窓のそばのテーブルに、ブンプクは老人を案内しました。老人が椅子に坐ると、ブンプクは言いました。

「いま新聞とハサミをお持ちします」

そして奥の部屋へ行き、少しして手にたっぷりの新聞と大型のハサミを持って、老人のところへ戻りました。

「ありがとう」と、老人は嬉しそうに言って、さっそくテーブルの上に積まれた新聞を手にとって、開きました。

「私は長年、日当たりの良い窓際で、新聞の切抜きをやって来たのだよ。これをしないと、どうにも一日が始まらないのだ。・・・なにになに、どこかの国では、ドジョウが首相になったとな。これはめずらしい。さっそく切り抜かなければ」

私は後ろから、ちらとのぞいてみますと、数年前の古新聞です。

「ちょっと古すぎないかい」 私は小声で、ブンプクに言いました。

「あの方には、新聞が読めるだけで嬉しいのです。新しい新聞を切り抜かれると、ほかの方が困りますから」

私は、眼を輝かせて新聞を読んでいるその老人を、あらためて見ました。たぶん半分ほどしか理解できなくなっているのですが、活字が目に入るだけでも、気持が和んでいるようです。

「今晚は、ここにお泊りになってはどうですか」 ブンプクは、老人に言いました。

老人は新聞に夢中になって聞き取れないようでしたので、ブンプクはくりかえしました。

「え、え、なんだって」 老人はやっと顔を上げました。

「今晚は、ここで泊りになれます」

「そうかい。それじゃあ、残業ということかい。そのソファで寝るのかい」

「柔らかいベッドがあります。それに夕食も出ます」

「それはありがたい。カップラーメンではなくて、まともな食事かい。会社の待遇も良くなったもんだ」

「では、ごゆっくり」

ブンプクと私は<仕事>に熱中している老人を残して、ホスピスを出ました。私はあらためて、道を歩いている老人たちを見わたしました。この人たちの中には、もしかして同じように、行くところも帰るところも知らない人たちがいるのではないか。そのことを、ブンプクに聞いてみました。

「そうなんですよ。でもそれが何か変ですか。この国では、老人たちは全く自由に、自分の思うとおりに生きています。ふいに家を出たくなれば、好きなままに出歩きます。帰れなくなれば、先ほどの施設のように、どこにでも泊まれるところがあります。この国には徘徊老人などという、嫌な言葉はありません。老人が出歩きたがるのはあたり前なのです。そのあたり前のことを、安全にできるようにするのが、老人国の務めなのです。そう、ダルマ大統領は言っています」

私の町でも、時々町の大きなスピーカーから、行方不明の老人のアナウンスが流れます。徒歩や自転車や、サンダル履きで、老人たちは思い思いの場所へと出かけてゆきます。そして、子供の頃の私がそうであったように、帰り路が分からなくなります。かといって、子供が家に閉じ込められたくないように、老人たちも、いつも家族に監視されたり、鍵をかけられたりはされたくないでしょう。歩けるかぎりには、誰でも、行きたいところに行きたいのです。ただたんに、戸外にいるだけでも、気持が広がるのですから。

「たしかにその通りだね。しかし、家では心配する家族がないのかい」

「老人国では、国民全員が家族ですから」ブンプクは答えました。「もし自分の家が分からなくなり、帰れなくなれば、誰でも親切に泊めてくれます。それに、あちこちに集団で生活できる、ホスピスがありますから」

何だか、この老人国では、私のやって来た国とは、しきたりが全く違うようです。急に好奇心がわきおこって、ブンプクにいろいろ聞きたくなりました。

「先ほどの老人は、こう言っては何だけれども、まるで意味のない仕事をしていたね。この国の老人たちの仕事は、みなあんなものなのかね」

「いいえ、セイトさんは誤解してますね。皆がみな、あちらの世界で言う<認知症>にかかっているわけではありません。しかも、それは特別なことではありません。私たちはそれを<幸福期>と呼んでいます。自分の思いの世界だけに生きられれば、それほど幸福なことはないではないですか。周りの人たちが、自分たちの生きている世界と違っているからといって、迫害したり、隔離したり、施設へ入れたりするのは間違っているのです。そう、ダルマ大統領は言っています」

「いや、私は認知症、いや幸福期の老人が特別だと言っているのではなくて、老人たちの普通の仕事について聞きたいのだ。新聞の切抜きだけで、この国の経済が成り立っているとは思えな

いからね。ちょっと皮肉な言い方になったのは、いつもの私のくせで、すまなかったが」

人前で、知らず知らず皮肉な口調になって、まわりから嫌われがちな私のことですので、ここは素直に謝っておきました。ブンプク・タヌキは、一向に気にした様子もなく、

「詳しいことは、後でダルマ大統領からお聞き下さい。この国では仕事はすべてボランティアです。だれもがこの国のために、自分のやりたいことをする。もちろん何もやりたくなければ、それも良いのです。老人には完全な自由と自立が保障されています。僕も、自分の好きで、宅配の仕事と介護の仕事をしています。難しいことは知りませんし、できませんから、何でも自分に合ったことをすれば良いのです」

私の来た国では、仕事は嫌なもの、相場は決まっていますが、そんなユートピアみたいなことが、現実に可能なのかと思いました。しかし、詳しくはダルマ大統領から聞くことにしました。そこで話題を変えて、

「大統領の住むホワイトハウスは、まだ遠いのかね」

「いえ、もうすぐです」と、ブンプクは答えました。そして少し先の、ほかの個人宅と全く変わらない家の前で、立ち止まりました。わずかに傾斜しているポーチをのぼって、表札を見ると、単にダルマと書かれています。ブンプクが呼び鈴を押すと、中からどうぞという女性の声がしました。ブンプクが鍵のかかっていないドアをあけると、低いあがりがまちに、少し大きめのひよこが迎えに出ていました。

「セイトさんをお連れしました」

ブンプクが言うと、ひよこさんは、後ろの私を見て、

「ダルマさんがお待ちです。どうぞお入りください」と言いました。

(つづく)

